

全体会レポート③

# ひな壇トーク! 「地域づくりと win-win の関係」

～地域づくりの達人たちがとっておきの「win-win」話を披露～

会場●竹の浦館（加賀市大聖寺瀬越町イ-19-1）多目的ホール

【ひな壇の皆さん】

- 近藤 哲史：財団法人 石川県産業創出支援機構コーディネーター  
第1分科会「スローフードとまちづくり〈加賀版〉」ゲスト
- 居長原信子：高知県四万十町十和おかみさん市リーダー  
第1分科会「スローフードとまちづくり〈加賀版〉」ゲスト
- 瀬戸 達：NPO法人 歴町センター大聖寺  
第2分科会「城下町大聖寺の景観まちづくり」協力団体
- 古田 希雄：岐阜県各務原市役所職員  
第3分科会「地域ブランドはこう創れ！」ゲスト
- 濱 博一：石川地域づくり協会コーディネーター  
第3分科会「地域ブランドはこう創れ！」コーディネーター
- 吉岡 幸彦：兵庫県姫路市建設局道路部街路建設課長、  
オータムフェスティバル in 龍野実行委員会副会長  
第4分科会「まちの魅力で人を巻き込め！」ゲスト
- 吉田 栄治：NPO法人 はづちを元事務局長、新宿あとむ地域福祉事業部所長、  
新宿区立西早稲田地域交流館館長  
第4分科会「まちの魅力で人を巻き込め！」コーディネーター
- 渡邊 崇志：ゲストハウス品川宿館長  
第5分科会「石川の多文化共生の進化、深化、新化をさぐる」ゲスト
- 川上 広造：アーテックス株式会社代表取締役  
第5分科会「石川の多文化共生の進化、深化、新化をさぐる」ゲスト

【進行役】

- 赤須 治郎：石川地域づくり協会コーディネーター  
第1分科会「スローフードとまちづくり〈加賀版〉」コーディネーター

【アシスタント】

- 村本 睦戸：石川地域づくり協会運営委員

**【司会進行】**今年の「ひな壇トーク」のテーマは、「地域づくりと win-win の関係」です。ここでは、全体会に先立って開催された5つの分科会のゲスト、コーディネーターの皆さんが、とっておきの「win-win 話」を披露します。それでは、進行役の赤須さん、よろしくお願いします。

**【赤須治郎】**今日の進め方は、「パネルトーク」というやり方です。これは、自分の言いたいことを短い文章にまとめて書いて、見せながら説明するというスタイルです。

地域づくりの会合などでフリーに話されると 15 分くらいしゃべって満足して平気で帰ってしまうような人が多かりして何も決まらない。そういうことを避けるために、今日のパネラーにまんべんなく話してもらうため、パネルで歯止めをかける。なおかつ、これが記録に残るわけです。あとから非常に整理しやすい。しゃべる人も、パネルに書いたことくらいしゃべろうということで話す。そういう方法を私たちは編み出してきました。それをショーとして、舞台の上でやろうということです。内容は分科会の内容でなく、皆さん共同で理解できるように、地域づくりにとって大事なことを現場で経験されたことを通して話していただこうと思っています。



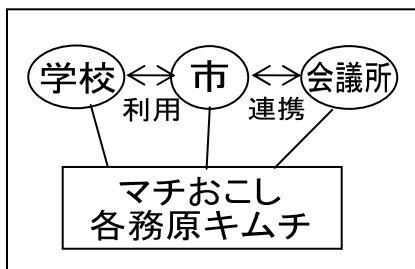
今日は、質問を3つ用意しました。誰が何を書いているかがまったく分からない状況です…。「win-win の関係」というのを今回はテーマに掲げました。「win-win とは何だろう」というところから始めたいと思います。パンフレットには「勝ち負けの勝ちではなくて、いい関係というとらえ方をしよう」と書いてあります。

それでは、今日のパネリストの皆さんから発表していただこうと思います。まずは古田さん、お願いします。

### 【質問 1】 win-win とは？

**【古田希雄】**人並みな答えなのですが、「各務原キムチ」の事務は、キムチ研究会がやっていて、その事務局を市役所がやっています。まちおこしは、市役所だけではできません。いろんなところと連携しなければできません。開発型のまちおこしにはお金がかかります。商工会議所や学校など、いろいろな団体がそれぞれの強みを持っていますので、連携して、お互いメリットのある、まちとして一つの取り組みを行っていくというのが、私の考える win-win の関係です。

例えば、商工会議所は地域のブランドづくりに関する補助金があり、市役所では申請できないものがある場合、商工会議所が申請する。事業はそれぞれの事業として成り立ちます。また、学校は、開かれた学校をめざしています。地域に貢献しているというメリットが出ます。市民や農協についても同じようなことが言えます。



【赤須治郎】次、吉岡さん、お願いします。

【吉岡幸彦】私の考える win-win は、関西弁ですけど、「ぼちぼちでんあ〜」。関西では「もうかりまっかー」というあいさつがあります。そのときに「ぼちぼちでんあ〜」と言う人は、結構もうかっていたり幸せだったりするのです。あかんときは、あかんと言います。ぼちぼちというのが、みんなが幸せになるキーワードかな。誰かがもうけすぎると不幸になる人も出ます。皆が幸せになれる仕組みづくりがいいのではないかと思います。

「オータムフェスティバル in 龍野」には多くの人に来て、商店街がもうかります。でも、それだけではなくて、シャッター通りのシャッターがその日に限って開いたり、ほかの人がそこでイベントをしたりします。地域の年配の方が、「昔の商店街に戻ったみたいやなあ」と懐かしがって喜んでいただけます。それも一つの「ぼちぼちでんあ〜」というか、小さな幸せの一つかなと。

【赤須治郎】少しやさしい言葉になってきたかなと思います。それでは次に居長原さん、お願いします。

【居長原信子】私は「もちつ、もたれつ！」っていうことやないかなと思います。お互いにバランスの取れた関係。どちらかが強すぎても大きすぎてもいけない。おかみさん市は会員 220 人くらいをかかえています。会員にも言えるし、行政にも、地域にもそうでないかなと思います。お互いバランスの取れた関係、同じレベルで物事を考えるというのが大切ではないかなと思います。



【赤須治郎】それでは次に川上さん、お願いします。

【川上広造】私の場合は、広告という仕事から、皆さんとは少々違うのですが、「思いやり」。広告の仕事

は、クライアントに利益を生ませるために私たちは何をすればよいか。同等の立場にいるというスタンスではなくて、相手が潤うことで私たちも潤う。そういうスタンスがあります。平等だと逆に居心地が悪い感じがします。相手がこういうことを考えているのかな、着地点はどこなのかなということを考えながらやるのが身に染み付いています。



【赤須治郎】続いて、吉田さん、お願いします。

【吉田栄治】私は「3つの協同」。役所の人を使う協働ではなくて、協同組合の考え方。かつての近江商人の「三方よし」、売り手よし、買い手よし、世間よしというような言葉があると思います。協同は辞書によると、「人と人が心を合わせ、力を合わせること」ということらしい。その協同を、働く仲間との協同、利用者やその家族との協同、それと地域との協同という3つの協同が成り立って、心と心、人と人が力を合わせていく関係が、win-win の関係ではないかなと考えています。

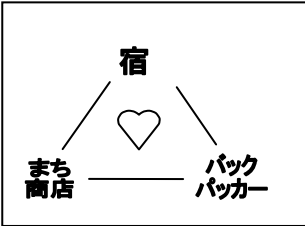
【赤須治郎】次、渡邊さん、どうぞ。

【渡邊崇志】「宿、まち・商店、旅人（バックパッカー）の三角形」です。簡単に言うと、みんなが「ありがとう」を言い合う構図の形です。

廃業した旅館を再生するとき、最初にやったことは、旅館にあったものを全部捨てたことです。ですから、旅人がまちに出てテレビを見たり、商店街のお風呂屋さんに行ったりということで、商店街の人たちから「ありがとう」と言ってもらえました。私たちが「ありがとう」と言って、旅人にまたいろいろな店を紹介します。旅人も「ありがとう」と言って、また戻ってきます。これらの関係がハートフルでつながっている関係ですかね。



渡邊崇志



【赤須治郎】では、近藤さん、お願いします。

【近藤哲史】敵対関係ではなくて、お互いがお互いを目標とする「ライバル」関係。敵対関係だと、相手のミスを探します。向上心のあるライバル関係というのは、お互いを認め合って、それぞれが育っていく形というふうに思っています。

【赤須治郎】それでは、お待たせしました。瀬戸さん、お願いします。

【瀬戸 達】「バッシング」です。私が最初に浮かんだのが良寛さんです。生まれ故郷である新潟の出雲崎に戻ってきた良寛さんを待っていたのは、今言うバッシングでした。大人からも受けたのですが、子どもたちからも厳しいバッシングを受けた。しかし良寛さんはニコニコして、その子どもたちに優しく親切に接した。やがて大人たちにも尽くしていき、次第に分かり合えるようになったそうです。何か新しいことをやろうとすると必ずバッシングがあります。最初の出会いはバッシングから始まるのではないのでしょうか。それを乗り越えた暁に win-win の関係になるのだと私は思っています。

【赤須治郎】win-win がバッシングというのだと思ったら、バッシングをきっかけに win-win が生まれてくるという話でした。では、濱さん、お願いします。

【濱 博一】「完璧にハッピーな勘違い」。思惑が一本の価値観しかない人たちの集まりだと、絶対喧嘩になります。日本人には、ナンバーワンとオンリー

ワンの違いがつかない人が多いのではないかと思います。外国の人だと、オンリーワンはすごくほめられます。私は「君、ユニークだね」と言われたらすごくうれしいです。「俺が一番だ」と言って小競り合いをやっている人たちに巻き込まれたくはないですね。絶対 win-win にならない。わざと価値観の違う人たちを集めてきて、それぞれが、「ここでいいな」というふうに思うような自己満足基準の設定ができれば、これは楽ですよ。それぞれのところで OK なわけですから。こういう関係を作れないかなど。勘違い。ただし、前提として完璧にハッピーでなければなりませんね。「思惑が違う」というところが最も大事ではないかなと思っています。

【赤須治郎】思惑と目標設定は違うということですか？

【濱 博一】思惑は皆隠す。「本当はおれがやったと言われたい」。けど、誰も言わない。この先は2番目の質問に関係するから、ここでは言いません。

【質問2】 win-win で、あなたが大切にしていることは？

【赤須治郎】それでは、「win-win であなたが大切にしていることは何か？」。では、濱さん。

【濱 博一】この人は何を企んでいるかな、ということを探知できなければダメですね。本音、名誉がほしい人、お金がほしい人、そのほかの人もいます。彼は何がほしいのかということを探知できないと、プロジェクトマネージャーにはなれない。メンバー全員のことがかかっていないと。



濱 博一

【赤須治郎】思いやりを、さらに探知のところまでということでした。では、古田さん。

【古田希雄】「お互いのメリット」。当たり前なのですが、win-win の関係は、これがないと成り立ちません。

各務原の取り組みも、win-win の関係がいくつも重なって一つのものになっています。各務原キムチのイメージソング『キムチの気持ち』は1円も出ていません。プロミュージシャンの持ち込みだったが、予算がなくて払えないと言いました。しかし、交渉の末、寄付してもらえました。この方は今、「ご当地ソングライター」として活躍しています。企画の部分も民間に任せなかったのですが、うまくいきませんでした。

【赤須治郎】では、居長原さん、お願いします。

【居長原信子】簡単に、「信頼関係が大事！お互い思いやる気持ち！」。お互い相手のために何ができるかということではないかと思えます。いつも行政とはいい関係でいたいと思っています。

おかみさん市は、最初 10 年間は行政が事務局をやってくれました。それもずっと同じ職員で。お互い、相手のために何ができるかを常に考えていないといけないよということを書いてきました。信頼関係が大事。何をやるにあたって、お互いを思いやる気持ちが大事だと思います。



【赤須治郎】では、次、川上さん。

【川上広造】「相手に勝ってもらおう」。外国人向けに発行しているフリーペーパーは、行政の支援を一切受けていません。広告収入だけで運営しています。外国人の数が少ない中で、かなり厳しい状況。しかし、広告の枠を埋めてくれ、というやり方ではなく、

広告を出していい思いをしてもらいたいという思いで、外国の人に広告を出してくれたお店を紹介したりしています。お店の人からも喜ばれています。

【赤須治郎】では、次、瀬戸さん。

【瀬戸 達】「金」。「口出す、汗出す、意見も発表する、行事にも参加する」、でも、「金は出さない」。これでは、物事は前へ進みません。3,000 円～5,000 円くらいなら出すけども、3万円～5万円だったら出さない。1万円札を出した人とは一緒にうまく活動していけます。



【赤須治郎】では、次、渡邊さん。

【渡邊崇志】「損して損して損してトクをとる（現場）～Give, Give, Give and Take (in Local Place)～」。地元でまちおこしをしていますが、三代前から住んでいるわけではありません。引越してきたとき、「外者」と言われました。対等な関係ではありませんでした。そこに入るには、自分が一步踏み込んで、ボランティアだの何だの、人一倍動きました。現場で汗を流して、信用してもらって、顔が繋がって、ようやくいい関係ができました。

【赤須治郎】では、次、吉田さん。

【吉田栄治】「自立と自律」。「はづちを」を立ち上げ



たとき、青年団は頼り体質だったが、やっていく過程で、自分たちでやっていかなければならないという自立意識が芽生えてきました。地域の子どもたちに大田楽を教えていくということで、自分たちを律することもできるようになっていきました。行政とも地域とも話せる大人になりました。自立していくことがポイントだと思います。

**【赤須治郎】**では、次、近藤さん。

**【近藤哲史】「情報」。**情報はあふれていますが、それを整理して自分のものにしていくことが大事なのではないかと思います。石川県産業創出支援機構には、「活性化ファンド」という補助金の制度があります。この補助金を取るためには、どういうミッションを立てればよいか、目的をきちんと持つ。そして、どういふしかけがあるかをしっかりと企画していけば、資金援助はしてもらえるでしょう。その後スタートしてからは、ライバルの情報をうまく得て進んでいくことが大事なのではないでしょうか。何もなければ、何もできません。情報があれば、それをきっかけに進んでいけます。

**【赤須治郎】**では、次、吉岡さん。

**【吉岡幸彦】「究極の最終目標の一致」。**いろんなバラバラの意見が出ますが、そこをつきつめていくと、どうしたい・どうなりたいというところがあると思います。オータムフェスティバルは、「このまちの良さを知ってほしい」という思いからやっています。商店街は「もうけたい」という思いでやっています。一時的に空き店舗を借りてやる人に対して商店街の人から「私たちの邪魔をしないで」という声が出たとき、商店街の人に「何でもうけたいのか」というところを突き詰めると、究極ですが、遠い目標（このまちの良さを知ってほしい）が一致していれば、いろんな手法でやっていることも理解・共有してもらえ、物事は成功するのではないのでしょうか。

**【赤須治郎】**ここで一度、質問タイム。今までのところで、聞いてみたいところがあればどうぞ。

**【会場内A】**瀬戸さんに質問。「金」とあったが、屋形船を運航するとき、まず金もないのに船を買い、その後「7人の侍」が出てきてお金が集まったという

ことでしたが、お金が集まるグループを抱えているのですか？

**【瀬戸 達】**お金を出してくれたのは、仲間内ではありません。初めて会った人に船の話をしたら、賛同してくれました。単なる相談だけだと、10人のうち9人はよい返事をくれませんが、実は船を買ってしまったという話をしたら、10人中8人は真剣に聞いてくれます。これで、お金を集めています。後は、次の質問のときに。

**【質問3】**あなたの口説き文句は？

**【赤須治郎】**それでは、第3問へ。「相手と良い関係になるためのあなたの口説き文句は何でしょうか」。では、瀬戸さん。



**【瀬戸 達】**「無」。景観まちづくりで、全国的に成功したところは、だいたい失敗していています。外資が入ってきて、まちをダメにしています。しかし、最初に失敗したら、その後は成功します。急激な向上・変革では、まちがダメになります。私が必ず言うのは、「今はない。いらぬ。子どもや50年後、100年後の大聖寺のために頼む」。NHKの番組で、全国7つの成功例の一つとして取り上げられました。理由は、「あなた方には『無い』から」ということでした。

**【古田希雄】**「この夢にかけてみようぜ！」。夜にいろんな人と会って、お酒を飲みながら夢を語り合っていくうちに、少しずつ賛同してくれる人を増やしていきました。立ち上げ時の初期のメンバーを大切にしています。売り出しているキムチの評価を上げ

るために、カリスマ・リストで韓国料理の鉄人を探し、パートナーになってもらうために東京へ行き直接会って話しました。本人はすぐにOKだったが、社長は最初なかなか返事をもらえませんでした。しかし、韓国に2年間出向していた強みを活かし、韓国語で思いを伝えると賛同してもらえました。

【赤須治郎】では、吉岡さん。

【吉岡幸彦】「旨い酒手に入ったんだけど…飲む?」。これですね。コミュニケーションは飲みニケーションというか、飲みながら話したところからしか生まれてこない。机をはさんで喧々諤々やっても、時間ばかりが経って、いい意見が出ない。お酒を飲んだほうが、やらないか!という気分になります。1回一緒に飲めば、旧知の友になれます。これが、物事を一番前に進めさせるいい方法かなと思います。



【赤須治郎】では、渡邊さん。

【渡邊崇志】「あ、スイマセン、ちょっと教えてください。それって超楽しくないですか?⇒アリガトウございます」。現場で下手に出ることが多いです。何にでも関心を持つ。常にその人の一番の魅力は何かと聞き出します。それに、自分の話も少しずつ盛り込みながら。そして、「ありがとうございます」



で話を終えます。1日1人で、1年で365人にでき広がりが出ます。

【赤須治郎】では、近藤さん。

【近藤哲史】「貴君しかいない」。この質問が一番困りました。というのは、人にものを頼んだ経験がないから。頼まれたことは山ほどあります。そのときの口説き文句は、「近ちゃん、あんたしかおらんがや」。この一言が、私を躍らせる一言。これからの仕事の中で、1回は使ってみたいです。



【赤須治郎】では、居長原さん。

【居長原信子】「無理せんでいいよ。無理ならいいよ。かまんかったらやって。たよりにしているからね」。高飛車に言うと、会員でも避けられます。やさしい言葉の中に、こっちの思いを分かってもらえるように努めています。

【赤須治郎】では、吉田さん。

【吉田栄治】「やります、できます、頑張ります」。今の口説き文句は、はづちをで経験したことがベースになっています。行政や連携先との間で使うのがこれ。大田楽の立ち上げ時、観光協会や町会に声をかけましたがダメでした。しかし、青年団、若者に声をかけたら集まってきました。彼らは、自分たちの拠点ができるのではないかと夢を持ちました。あのときのチャンスを逃さなかったことは、今のまちづくりの中でも役立っています。

そしてもう一つは、「あなたが主人公」。地域の人と一緒に仕事するときに言います。大田楽をやっていたとき、まずは自分が踊りを楽しみました。楽しかったです。次にまちの人を誘って一緒に楽しみました。そして、まちの人が主人公になったとき、一緒に輪が広がっていきました。

【赤須治郎】では、川上さん。

【川上広造】口説き文句ではないですけども、「相手の着地点を考える」。今年、地元の宿泊施設と一緒に新しいプロジェクトを立ち上げました。そのとき、最終着地点が何かきちんと言わないと説得できません。何のためにやるのかを相手にしっかりと伝える。そして、相手の着地点をしっかりと考えることが大切かなと思います。

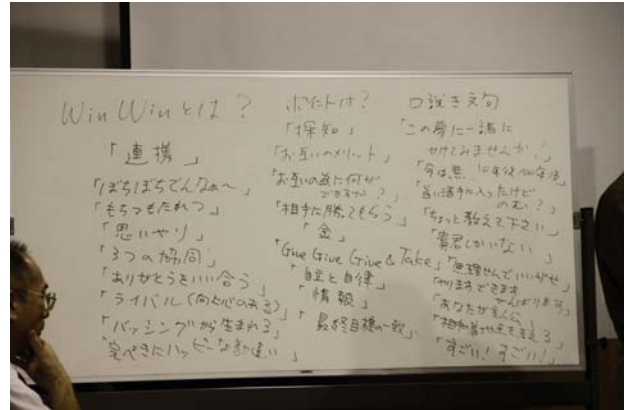
【赤須治郎】それでは最後に濱さんに締めも含めて。

【濱 博一】皆さん、すごいですよね。win-win の関係を本質的に見抜いています。口説き文句もすごいですよね。「すごい！すごい！」。どんな方にも長所があり、どんな話にもキラッとするとところがあります。そこをはずさない。これを言われて嫌な人はいません。コーディネーターは、いろいろな人に動いてもらわなければなりません。これは本心、嘘で言えません。人のすごいところを発見すると楽しくなります。一番効果があったときは、嫁さんに言ったとき。立場によって見ているところは違いますが、本質的には同じではないかなと。いかに相手との関係を柔らかくしながら、最終目標が一致するようにする、その部分を見出す、というところで皆さん苦心されています。いろいろなテクニックを使いながらやっています。参考になれば、皆さんもこれらの技を使っただければ。

【赤須治郎】ありがとうございました。この続きは交流会で。

「活性化」という言葉は、もともと化学用語で、反応が起こりやすくなる状態のことを言います。地域づくりで活性化というとき、多くの人は経済的な活性化のことを頭に浮かべますが、同時に社会的活性化というものにも着目しなければならない。社会的活性化とは何か。自分たちの関係が活性化してること。今日は、ここで皆さんの話を聞いていたら、気持ちがワクワクしてきませんでしたか。楽しくなって、「あっ、何かやってみよう」と思い始めた人もいるのではないのでしょうか。こういう心の状態をつくっていくことが、私たちが考えている活性化では

ないかなと思っています。まずは「心の活性化」、それがどうしたら行動になっていくのかということ、技を使ってやってくことになると思います。今日の口説き文句を参考にしながら、やってみてはいかがでしょうか。



Win Win

■参加者アンケート

①参加者数・アンケート協力者数

	参加者	アンケート協力者数
第1分科会	32名	15名
第2分科会	18名	8名
第3分科会	28名	14名
第4分科会	18名	6名
第5分科会	30名	13名
事務局等	20名	—
総計	146名	56名

②開催を何で知りましたか？

チラシ	11名
知人の紹介	20名
ホームページ	2名
その他	19名
総計	52名

③開催地について希望はありますか？

奥能登	8名
中能登	6名
金沢	11名
加賀	11名
その他	5名
総計	41名

\*分科会内容のアンケートは、各分科会レポートの最終ページに掲載しました。

④来年はどんなテーマを希望しますか？

- 奥能登の地域ブランドについて。
- 地域ブランドの成功例についてお話を聞きたいです。
- 「食」「歴史・景観」「おもてなし」「4年後の新幹線開業による変化」など。
- シンプルな地域資源を活用して地域を盛り上げている事例を扱う分科会。
- 開催地にあった分科会を。
- 食の文化の紹介。
- 景観整備と市民の感想について。
- 移住・交流に関する取り組み
- 人材育成（人づくり）をテーマにした分科会に参加したい。
- 体験型。
- 各務原は10万人以上と比較的大きい市で市場も近く、人的資産もある恵まれた地域なので、過疎地の小さい市町で市場が遠いところの成功例があれば、話を聞きたい。
- いかにして地域住民を巻き込んで地域づくりをするか。
- 海外客へのもてなし。
- 「里山」をテーマにしたまちづくり、「エコツーリズム」をテーマにしたまちづくり。
- もう少し掘り下げたテーマは？
- 実行させるための第一歩。
- 奥能登、中能登、金沢、加賀の小・中・高生を対象とした分科会。スタッフは石川県の大学生がつとめる。
- 暮らしを手で作っていく事。持続可能な自給自足論など。海外では実践されていて、なぜ日本ではこうも実践・実行が難しいのか…。
- 「地域で頑張る団体がどのように自立しているのか、の手法を教えます」など。
- 人が集まる仕組み、社会行動学。
- 観光誘客と地域住民の意識向上。
- 多文化共生をもう一度お願いします。

### ⑤全体会についての感想

- 分科会報告で、様々な意見を聞くことができよかった。少々長くなりひな壇トークの時間が押されたのが残念。
- 地域づくりに携わる人の熱いお話が聞けてよかったです。
- 全体会は表彰式終了後に帰りましたが分科会会場が分散したせいか、参加者が少ないと感じました。
- これまでに数回参加したことはありましたが、これまで以上に知識を得た中で前向きに参加出来たことで、多くのヒント・収穫を得ることができたと思う。
- 岐阜県各務原市の商品アピールが面白かったです。高知県のおかみさんも遠くから来ていただいたことに感謝します。
- 各務原市のキムチの話は大変興味深いもので、話題づくりというものがいかに大切かということと、一人で出来るものではなく、様々な人が協力し合って、地域づくりが成り立つ気がしました。
- フリートークは、パネリストの意見がとても良かった。
- スケッチブックで意見を書いてもらったのが、ホットで良かった。
- 初参加であり、どんなものか認識できた。
- 地域づくり表彰の受賞団体の活動を紹介した「展示コーナー」を開設すればどうか。
- 初めての参加だったので、興味を持って出席しました。各グループの悩みも多いと思いますが、「諦めない・困らない」を目標に掲げて努力する姿が素晴らしい。
- 前回から参加させてもらっていますが、ひな壇トークが大変楽しいです。
- 固くならず、楽しい雰囲気で行えてよかったです。
- 多様な分野の方の生の声が聞けて良かった。
- 会場からも意見が出ていたし、一体感があってよかったです。

- 移動手段があればもっとよかったのですが、会場移動が大変でした。
- 各分科会の各コーディネーターの報告も分かりやすく、その分科会に参加していなくても十分イメージ出来たし、ひな壇トークも初めて経験するトーク形式でしたが、大変楽しく、有意義で参考になりました。とても素晴らしかったです。
- なかなかおもしろかったです。分科会の報告時間がもう少しあってもよいのでは。
- 大変参考になりました。特に熱意のある方が大勢参加され、情報を得られた事は良かった。パネルディスカッションはおもしろく参考になった。
- 出演者の方すべてがとても魅力的で、地域づくりの核となるのは、「人」であり「人間力」であると思った。皆さんの熱意を種火にして、自分の暮らすまちの地域振興に活かしていきたい。
- 各分科会の様子が分かり易く紹介されていた。
- 質問の時間をもっととった方がいい。
- パン屋さんの家族の話がとても勉強になりました。自分のやりたいことをやりながら、社会のベクトルを考える。個と社会の共生にたどり着くようなヒントをもらいました。
- 各分科会の報告にもう一工夫があれば。多くの事は必要なく、具体的な一例を出してもらえば良い。
- 分科会の雰囲気は少し固さが残りましたが、全体会はフランクな話（意見）がポンポン出てきたので参考にしたいと思います。
- 司会とパネラーがかみ合っていない。ひな壇トーク自体はおもしろいと思うので、①事前打ち合わせ、②アドリブ能力の向上、があるとよい。
- 加賀市の地域の取り組みを理解していなかったのかわかりづらかった。ただ、加賀市の皆さんの熱い思いは十分伝わってきた、うらやましい。

⑥「地域づくり円陣」全体を通して、お気づきの点や改善したら良いと思われること

- 地域づくり団体の真摯な姿勢がうかがえてよかった。分科会～全体会～交流会と、フル一日は少々長いかなと感じました。(県外の方や能登の方のためにも。)
- 来年も参加したいです。
- 遠かったけど、福井県境まで行った甲斐があった。
- 全体会や交流会の時間をもう少し繰り上げて、早くしてほしい。
- 日曜日は、翌日仕事なので、あまり長居できない。
- 地域づくりに熱いリーダークラスの人たちを中心にどんどん進歩していくことも必要ですし、脇役・一般メンバークラスの人たちの心を盛り上げてあげることが大切ですし、「二兎追うもの一兎も得ず」にならないようにしなければと思いました。
- 遠方から大勢の人が来ていただいて、盛り上がったことがよかった。
- 参加者に外部（一般）の方が少なかった気がするので、一般の方へのPR活動ももっと積極的に行ったらよいと思います。
- もう少しPRの方法を考えたら良いと思う。
- 1ヶ所集中的に見学する場所もあるとよかった。
- 円陣に参加せずに頑張っている人（グループ）に一声運動することにより、若い方の参加も増えると思う。
- こんな良い企画なので、広く一般の人にも参加できるようにPRしたらよいと思います。
- 円陣を石川名物にしましょう！
- 景観づくりの苦労話、益々の御活躍を祈ります。
- すばらしい環境（竹の浦館）やお世話いただくスタッフ（例えば食堂の方々など）も献身的なご対応で、全て感動しました。本当にありがとうございました。竹の浦館（旧瀬越小学校跡地）の活用も本当に感心しました。
- 他の地域の地域づくり関係者と交流が図れるいいイベントだと思った。分科会の人数も15～20人

で話し合いができる適度な大きさと、良かったと思う。あまり多いと質問等しづらくなると思うので、定員はあまり大きくない方がよい。

- 分科会の時間がちょっと長いように思った。また、分科会数が多いと、分科会参加者が分散するので、分科会を2つ程度にして、全体会でじっくり共有するという手法でもよいかも知れない。
- 初めての参加でしたので興味深かったです。また機会があれば参加したいです。
- それぞれの地区や活動などを紹介したパンフレットなどがあれば持参した方がよい。
- 分科会は15人前後でとても親密感があるので、最初に参加者の自己紹介の時間があると、もっとWSの議論も盛り上がると思う。
- 地域にいくつも組織・団体がありながら、タテ・ヨコのネットワークとコーディネートできる組織の確立に苦心する。
- 各分科会の代表の勢いに負けて、質問できない人が多いと思うので、勢いに負けずに質問してほしい。もっと思っていることを言うべき。
- 雰囲気がありました。最初はちょっとかたくて、私はスタートは困りました。お昼のピクニック形式の時間は良かったと思いました。ゲストの方たちのお話が急ぎ足だったようで、もっとゆっくりと時間を取っても良かったんじゃないでしょうか。
- 同一会場内で、全分科会が開催できたらよい。分科会を2部構成にして、途中で別の分科会へ移動出来るようにしてはどうだろう。
- 他の分科会にも参加できたらうれしいです。全部を同一会場にする意味もあるなぁと感じました。
- 成功自慢にならないように成功体験を伝える方法を検討したい。交流にもっと力点を置いてよいのでは。
- 各分科会の内容を理解しきれなかった。もうちょっとわかるような工夫があれば良かったと思う。
- 県外へのアナウンス等もしてはいかがでしょうか？

いしかわ地域づくり円陣の  
名物プログラム！

## 交流会

全体会終了後は、地域づくりに携わる人や、地域づくりに興味がある人など、誰でも参加できる「交流会」を開催。会場内には地域自慢の味と技「特産物コーナー」が設置された。全国から集った地域づくりの仲間がともに食べて飲んで、大いに夢を語り合った。

石川地域づくり協会・植村会長も参加



進行役は「石川地域づくり塾生の二人



コーディネーター・赤須さんは、新ブランド「加賀紅茶」で特製ジンジャーミルクティーを作ってくれました







### 【石川地域づくり協会事務局】

〒920-8580 金沢市鞍月 1-1 石川県企画振興部地域振興課内

TEL (076) 225-1312 FAX (076) 225-1328 [chiiki@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:chiiki@pref.ishikawa.lg.jp)

《石川地域づくり協会ホームページ》<http://www.pref.ishikawa.jp/shinkou/dukurikyou/>